

化学・生物総合管理の再教育講座(講義内容)

前期

科目No.	501	科目名	科学コミュニケーション学概論		サブネーム	科学技術と社会に関する議論		
連携機関名		レベル	基礎～中級		講義枠	土曜日	講義時間	10:00～11:30, 11:50～13:20
科目概要	今日、科学技術と社会を巡る様々な問題が存在している。地球環境、原子力、食の安全性、生命操作などの問題である。そういった問題は、すべて固有の特徴を持ち、専門的かつ学際的なものであり、したがって容易に解決できるものではない。しかし、こういった問題を考えるための基本的な枠組みや考え方については、これまで培われてきたものも多数ある。この科目は「科学技術と社会」を考えるための「考え方」について解説を行い、科学コミュニケーションの具体例を学ぶ。							

サブタイトル	No	講義名	講義概要	講義日	教室	講師名	所属
「科学技術と社会」の考え方	1	社会的な視点と科学	科学研究は、社会的な活動の1つである。したがって、社会科学的な見方の対象になる。社会的な視点からは、科学研究がどのように見られるのか、科学社会学の見方について、基本的なことがらを解説する。	4月15日	共通講義棟 1号館 204教室	林真理	工学院大学
	2	価値構造の観点から見た「日本における科学技術と社会の現状」	現在の日本における科学研究は、どのような価値の中に置かれているか。研究の推進、産学連携、倫理問題、安全性の考え方等、科学コミュニケーションの前提となっている様々な問題領域を探る。	4月15日			
	3	科学をめぐる社会的な論争	コミュニケーションを通じての意思決定や合意形成が求められる場合、そこでは「論争」の存在が前提となる。科学論争とはどのようなものか、とりわけ専門家レベルでは閉じていない論争とはどのようなものであるかについて、考察する。	4月22日			
	4	科学コミュニケーション前史	特に日本において、科学コミュニケーションが必要とされる事態が生じてきた背景と、現状に至るまでの歴史の一端を紹介する。	4月22日			
科学技術コミュニケーションの考え方(具体例をもとに)	5	科学技術情報——その生産と流通	科学技術情報は生産過程から流過程を経て社会のさまざまな場面に至る。科学技術者集団、科学技術運営に関わる集団、メディアを主要なアクターとしてこの流れを捉える。ここでは、生産過程における特徴も扱うが、主要な関心は、情報の媒介(変換)過程にある。	5月13日		若松征男	東京電機大学
	6	科学技術活動への「市民」参加	科学技術の運営に、利益ばかりでなく、多様な影響を被る社会の声が必要である。こうした考え方が、市民社会や民主主義についての議論と共に、次第に大きくなりつつある。ここでは、この社会の声、考え方をどのように機能させることができるかを考える。	5月13日			
	7	科学カフェとはなにか	1997年以降にフランスとイギリスではじまった科学カフェは、その後、国際的にも大きな広がりを見せ、日本でも一昨年来、全国の大学や財団、NPOなどによって幅広く取り込まれるようになってきた。本講では、その具体的な概要を紹介する。	5月20日		中村征樹	文部科学省科学技術政策研究所
	8	科学カフェからみる科学コミュニケーション	科学カフェは、他の科学コミュニケーション活動と比べてどのような特徴やメリットを持ち、また、科学技術と社会との関係をめぐってどのような課題を提起しているのか。科学カフェを素材に科学コミュニケーションのありかたについて検討する。	5月20日			
	9	サイエンスショップとは何か	1970年代にオランダに生まれたサイエンスショップは、大学やNGOを拠点にして、市民の要望に応える科学研究や技術開発を行う組織であり、現在は欧州を中心に世界的に広がっている。その歴史と活動内容、運営方式について、欧州の例から紹介する。	5月27日		平川秀幸	大阪大学コミュニケーションデザインセンター
	10	サイエンスショップからみた知識基盤社会における大学の役割	現代社会は知識基盤社会とも呼ばれる。それは経済の面だけでなく、人々が自ら社会の問題を協力して解決し、住みやすいコミュニティを創造する政治的な営みにおいても、科学技術の知識が重要な役割を果たす社会である。そのような社会における大学の役割をサイエンスショップの働きの観点から考察する。	5月27日			
	11	日本型サイエンスショップの形成のために	市民科学研究室の活動紹介を軸に、海外のサイエンスショップやCBR(communitiy-based research)や日本の様々な科学技術NPOの活動事例も交えながら、科学技術に関連する社会問題の解決においてNPOがいかなる役割を担うのか、その現状と課題を概観し、市民・生活者の視点に立った科学技術コミュニケーションがいかにあるべきかを考える。	6月3日		上田昌文	NPO法人市民科学研究室
	12	問題解決の一手法としてのワークショップ	ある問題を数多くある多種多様な問題群の中に適切に定位させるには、その問題に関する既存の知を収集するだけでなく、その問題に対する自らの想像を自由に膨らませ、他者のそれと刷り合わせて検討していく、というやり方が考えられる。市民科学研究室の調査データも交えて制作したワークショップ「携帯電話・政策論争」を体験してもらいながら、生活に複雑にからまった科学技術の問題を解きほぐす一つの手法としての活用法を考える。	6月3日			
	13	科学館におけるコミュニケーション活動	科学館という場における、科学と社会を結びコミュニケーション活動が、実際にどのように営まれ、何を生み出しているのかについて、日本科学未来館における、展示、イベント、映像、グッズ、実験教室など具体的な実践例を交えて議論していく。	6月10日		長神風二 (交渉中)	日本科学未来館
	14	最先端の科学研究を題材にしたコミュニケーションは可能か?	社会への影響を多大に持ちながら、必ずしも社会から十全な理解を得ていると言えないのが、最先端の科学研究である。現在進行形の科学研究の内容そのものを題材にしてのコミュニケーション活動の実践例について報告し、その意義や可能性について、議論する。	6月10日			
まとめ	15	科学技術と公共性	ここまで学習したことを踏まえて、「科学と公共性」という視点から、現代社会における科学技術をめぐるコミュニケーションはどうあるべきかを考察する。	6月17日		林真理	工学院大学